イジゴロ池由来

（新一郎）昔、「いじごろう」という人がね、夏井の方からずっとこう、山を歩いて来たもんでっあったそうだね。それで、途中から水飲みたくて、水飲みたくて、どうすこともならねがったたども、なかなか水のある場所さ、行かなかったっと。歩いて歩いているうちに、ある所に昔は「馬のまっぽ」としゃべった水たまりっこあって、その水たまりっこの水が飲みたくて、とてもとても美味(おい)しして、美味ししして、いっぺばり飲んだって

やずがね、二へんも三べんも飲んだっと。それでも、たいーした、うめかったど。そいで、まずその時は家へ帰って、そしていたども、とてもその水、飲まねばなんねしてはぁ、また飲みたくなって、またそこへ来て飲んだもんだそうだ。そこにいるうちにはぁ、とてもとても、水沢だもの、帰られなくなったっけ、そのぉ、太くなってしまったど。水のおかげでが肥えたか、何でだが肥えたか、肥えてしまって、「とてもオレだばこれで家さ帰ったって、やずがねし」。そして、下を見たっきゃぁ、池あったがら、「ここの池さはいる」って気持ちでそこさ入ったわけだ。それでその、入ったとこが昔から「イジゴロ池の沢」、「いちごろう」が入ったがら、「イジゴロ池の沢」ということに、そこの名称が決まったという話であった。

夏井から来たか、また石川の方から来たか、いずれ夏井の方向から来たっといって。峰浜の方から来たもんだやら、また、東雲の方から来たもんだやら、わからねった。山道はそういうのは、昔はずっと峰浜と常盤の境、久喜沢の沢を登ってこば、境がずっとあったもんだったな。んだども、水飲みてぇったばって、途中で、みんな水あらったな。だってその途中の水、飲まいんで、そのイジゴロ池の「馬のまっぽ」せば、馬飲むあった。どっさりたまった水だっということだったな。そこさたまった水飲んだっきゃぁ、たいしたうめかった。そいで、いずれ帰ったばって、とっても、もっと飲みてしてなんもかもなして、また来て、今度あまりに太くなってしまって、家さはなも、帰れいねぐなった。それで、下見たきゃぁ池あったし、その池さ入った。

イヂゴロウが入ったところは、二メーターか三メーターのとこさ、なーんも、草も生いねったものな。そいで、その脇さだば、みんな草浮いて、そこ、丸っけくなってらったものな。草おがってるとこな。この頃だば、見たことねぇ。何十年って見たことねぇ。

毘沙門の憩いの広場から米代林道、あれが通ったから、それをずっと行けば、沼の向かいの沢なってらった。道路から左のとこで、沼越えて行かねば行かねったものな。それが越えっときどこまた、ちゃんと、もとだばあったもんであったばって、今ほら、長い堤さ水溜めるって堤防大っきくしたっきゃぁ、そこ川水あるときだば、一面なって行かいねったものね。橋をかけてあるったって、話を聞いたばって、わたしもここの所、行ったことねから、わかんねぇ。

(ハルヱ)昔は大っきい堤ここさあって、ここに道路あらったものね。ここ越えていけばイチゴロウ池あらった。ここにもまた、小っちゃけぇ沼あらじぃ。これの境に堤防みたいなやつあらったものね。大っきい沼の水ねぐなれば、こっちの小っちゃけぃ沼の堤の水出すて、田んぼさかけらったものね。ここにちょうど堤防、何百もねべたってなぁ、その堤防さ道路あらった。ここさぁっとあがって行けば、その堤っこあらじぃ。

(新一郎)そこんとこね、山谷の牧場であったから、そこさ馬で

もベコでもいがったものね。へぇば、それを馬でもベコでも行ぐすばって、池があるから少し心寂しいやったものね。そういう思いさったものなぁ。それでその池のそばさ行って笛吹けば、何も草もねぇことから、あぶくっこボコボコ、ボコボコあがってきたもんだっていう、ほんとだかわかねども、そういう話聞いて。誰というわけでなく、昔の人としゃべらず、はっきり覚えている人もあったばって、忘れてしまった。誰それしゃべったっということは、ただ年寄りんど集まって話すらぁず、オレ聞いて、これぐれぇおべぇた。

そして今そこ、財産区っていうか、分けて、個人の林になってしまったもんな。だから、今度、牧場の時だば歩ったばって、馬もいねばベコもいねば、個人に分けた。その池のとこが誰かのものになってるはずだった。昔はわらびなど採りにあったもんだばって、いま誰も採にいく人もいねし、自分の林下刈りに行けば、それぐらいのもんだったな。

大倉新一郎（大正2年生・85歳）（常盤）

ハルヱ（大正4年生・83歳）

（解説）

常盤から北上して山谷に至り、そこで常盤川から分かれて毘沙門沢に入っていくと、ほぼ一キロで堤があり、その奥に大きな堤がある。その辺は牛の放牧場でもあり、薪を積んだ馬の通る道筋でもあった。しかし普段は人の行き交いもなく、寂しいところであった。途中に馬に水を飲ませたり、人がのどを潤す水がほしいところでもあった。そういうわびしい山野の生活の中で生まれた話であろう。水には霊的な力があり、人に活力を与えてくれる。元旦の若水汲みなどもそうである。水神様の信仰もある。また河童のような水に住む妖怪も生まれてくる。ここにあげた話は、何か魔物にとりつかれた農夫の話で、水を飲んで酔くなり最後は沼に入ってしまうという結末からすると、河童に引きずり込まれたようにもうけとれる。山中での孤独な農夫の姿を示している。